

## 第 3 章

# ルート系

この章において、特に断らない限り体  $\mathbb{K}$  は代数閉体<sup>\*1</sup>で、かつ  $\text{char } \mathbb{K} = 0$  であるとする。また、Lie 代数  $\mathfrak{g}$  は常に有限次元であるとする。

### 3.1 公理的方法

**Euclid 空間** (Euclid space) とは、

- 体  $\mathbb{R}$  上の有限次元ベクトル空間  $\mathbb{E}$
- 対称かつ正定値な双線型形式  $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}: \mathbb{E} \times \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{R}$

の組  $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$  のことを言う<sup>\*2</sup>。Euclid 空間  $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$  の任意の元  $\alpha \in \mathbb{E}$  に対して、

- **鏡映面** (reflecting hyperplane)<sup>\*3</sup>

$$P_{\alpha} := \{ \beta \in \mathbb{E} \mid (\beta, \alpha)_{\mathbb{E}} = 0 \} = (\mathbb{R}\alpha)^{\perp}$$

- 鏡映面  $P_{\alpha}$  に関する**鏡映** (reflecting)

$$\sigma_{\alpha}: \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{E}, \beta \mapsto \beta - 2 \frac{(\beta, \alpha)_{\mathbb{E}}}{(\alpha, \alpha)_{\mathbb{E}}} \alpha$$

を考える。

$2 \frac{(\beta, \alpha)_{\mathbb{E}}}{(\alpha, \alpha)_{\mathbb{E}}} \in \mathbb{R}$  が頻繁に登場するので、

$$[[\beta, \alpha]] := 2 \frac{(\beta, \alpha)_{\mathbb{E}}}{(\alpha, \alpha)_{\mathbb{E}}}$$

と略記することにする。写像  $[[\cdot, \cdot]]: \mathbb{E} \times \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{R}$  は記号的には内積のように見えるかもしれないが、あくまで第一引数についてのみ線型なのであって、対称でも双線型でもないことに注意。

<sup>\*1</sup> つまり、定数でない任意の 1 変数多項式  $f(x) \in \mathbb{K}[x]$  に対してある  $\alpha \in \mathbb{K}$  が存在して  $f(\alpha) = 0$  を満たす。

<sup>\*2</sup> Euclid 空間と言って位相空間のことを指す場合があるが、そのときは双線型形式  $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}$  を使って  $\mathbb{E}$  上の距離関数を  $d_{\mathbb{E}}: \mathbb{E} \times \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$ ,  $(x, y) \mapsto (x - y, x - y)_{\mathbb{E}}$  と定義し (これは通常 **Euclid 距離** と呼ばれる),  $\mathbb{E}$  に  $d_{\mathbb{E}}$  による距離位相を入れる。

<sup>\*3</sup> 余次元 1 の部分  $\mathbb{R}$ -ベクトル空間。最右辺は対称かつ非退化な双線型形式  $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}$  による直交補空間の意味である。

$\sigma_\alpha$  は  $\mathbb{R}$ -線型でかつ  $\forall \beta \in \mathbb{E}$  に対して

$$\begin{aligned}\sigma_\alpha \circ \sigma_\alpha(\beta) &= (\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha) - \llbracket (\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha), \alpha \rrbracket \alpha \\ &= \beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha + \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \llbracket \alpha, \alpha \rrbracket \alpha \\ &= \beta - 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha + 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha \\ &= \beta\end{aligned}$$

を充たす, i.e.  $\sigma_\alpha^{-1} = \sigma_\alpha$  なので,  $\sigma_\alpha \in \text{GL}(\mathbb{E})$  である.

### 補題 3.1.1: 鏡映の特徴付け

Euclid 空間  $\mathbb{E}$  と,

- $\mathbb{E} = \text{Span}_{\mathbb{R}} \Phi$
- $\forall \alpha \in \Phi, \sigma_\alpha(\Phi) = \Phi$

を充たす  $\mathbb{E}$  の有限部分集合  $\Phi \subset \mathbb{E}$  を与える.

このとき,  $\sigma \in \text{GL}(\mathbb{E})$  が

**(RF-1)**  $\sigma(\Phi) = \Phi$

**(RF-2)** 余次元 1 の部分ベクトル空間  $P \subset \mathbb{E}$  が存在して,  $\forall \beta \in P, \sigma(\beta) = \beta$  が成り立つ

**(RF-3)**  $\exists \alpha \in \Phi \setminus \{0\}, \sigma(\alpha) = -\alpha$

の 3 条件を満たすならば  $\sigma = \sigma_\alpha$  (かつ  $P = P_\alpha$ ) である.

**証明**  $\tau := \sigma \circ \sigma_\alpha (= \sigma \circ \sigma_\alpha^{-1})$  とおき,  $\tau = \text{id}_{\mathbb{E}}$  であることを示す.

**(RF-1)** より  $\tau(\Phi) = \Phi$ ,  $\tau(\alpha) = \alpha$  が成り立つので  $\tau|_{\mathbb{R}\alpha} = \text{id}_{\mathbb{R}\alpha}$  である. さらに  $\mathbb{R}$ -線型写像

$$\bar{\tau}: \mathbb{E}/\mathbb{R}\alpha \longrightarrow \mathbb{E}/\mathbb{R}\alpha, \beta + \mathbb{R}\alpha \longmapsto \tau(\beta) + \mathbb{R}\alpha$$

は well-defined だが, **(RF-2)** より  $\bar{\tau} = \text{id}_{\mathbb{E}/\mathbb{R}\alpha}$  である. よって  $\tau$  の固有値は全て 1 であり,  $\tau$  の最小多項式  $f(t)$  は  $(t-1)^{\dim \mathbb{E}}$  の約元である. 一方,  $\Phi$  は有限集合なので,  $\forall \beta \in \Phi$  に対してある  $k_\beta \in \mathbb{N}$  が存在して  $\tau^{k_\beta}(\beta) = \beta$  を充たす. ここで  $k := \max\{k_\beta \mid \beta \in \Phi\}$  とおくと, **(RF-1)** より  $\tau^k = \text{id}_{\mathbb{E}}$  が言える. よって  $f(t)$  は  $t^k - 1$  の約元でもある. 従って,  $f(t) = \gcd((t-1)^{\dim \mathbb{E}}, t^k - 1) = t - 1$  だと分かった. 故に  $\tau = \text{id}_{\mathbb{E}}$  である. ■

### 3.1.1 ルート系

前章で与えたルート系の公理を再掲するところから始めよう:

#### 公理 3.1.1: ルート系

- 有限次元 Euclid 空間  $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$
- $\mathbb{E}$  の部分集合  $\Phi \subset \mathbb{E}$

の組  $(\mathbb{E}, \Phi)$  が **ルート系** (root system) であるとは, 以下の条件を充たすことを言う:

**(Root-1)**  $\Phi$  は 0 を含まない有限集合で, かつ  $\mathbb{E} = \text{Span}_{\mathbb{R}} \Phi$  を満たす.

**(Root-2)**  $\lambda\alpha \in \Phi \implies \lambda = \pm 1$

**(Root-3)**  $\alpha, \beta \in \Phi \implies \sigma_{\alpha}(\beta) \in \Phi$

**(Root-4)**  $\alpha, \beta \in \Phi \implies \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \in \mathbb{Z}$

$\Phi$  の元のことをルート (root) と呼ぶ.

! 本資料の以降では, 文脈上直積集合の要素との混同が起きる恐れがないときは **Euclid 空間**  $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$  に備わっている双線型形式を  $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}$  と書く代わりに  $(\cdot, \cdot)$  と略記する.

ルート系と言ったときに, **(Root-2)** を除外する場合がある. その場合我々が採用した定義に該当するものは **簡約ルート系** (reduced root system) と呼ばれる.

#### 定義 3.1.1:

**ルート系**  $(\mathbb{E}, \Phi)$  の **ランク** (rank) とは,  $\dim \mathbb{E} \in \mathbb{N}$  のことを言う.

公理 **(Root-4)** は, 任意のルートの 2 つ組の配位に非常に強い制約を与える. というのも, 2 つのベクトルのなす角の定義を思い出すと,  $\forall \alpha, \beta \in \Phi$  に対してある  $\theta \in [0, \pi]$  が存在して

$$\llbracket \beta, \alpha \rrbracket = 2 \frac{\|\beta\|}{\|\alpha\|} \cos \theta \in \mathbb{Z} \quad (3.1.1)$$

$$\llbracket \alpha, \beta \rrbracket \llbracket \beta, \alpha \rrbracket = 4 \cos^2 \theta \in \mathbb{Z} \quad (3.1.2)$$

が成り立たねばならないのである.  $\llbracket \alpha, \beta \rrbracket, \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \in \mathbb{Z}$  かつ  $0 \leq \cos^2 \theta \leq 1$  なので, (3.1.2) から

$$\cos^2 \theta = 0, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 1)}{4}, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 2)}{4}, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 3)}{4}, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 4)}{4}, \frac{(\pm 2) \cdot (\pm 2)}{4} \quad (\text{複号同順})$$

しかあり得ないとわかる. **(Root-2)** も考慮すると,  $\|\alpha\| \leq \|\beta\|$  ならば\*4 あり得る可能性は以下の通り\*5:

表 3.1: 可能なルートの 2 つ組  $\alpha, \beta$

$\llbracket \alpha, \beta \rrbracket$	$\llbracket \beta, \alpha \rrbracket$	$\theta$	$\ \beta\ ^2 / \ \alpha\ ^2$
0	0	$\frac{\pi}{2}$	-
1	1	$\frac{\pi}{3}$	1
-1	-1	$\frac{2\pi}{3}$	1
1	2	$\frac{\pi}{4}$	2
-1	-2	$\frac{3\pi}{4}$	2
1	3	$\frac{\pi}{6}$	3
-1	-3	$\frac{5\pi}{6}$	3
2	2	0	1
-2	-2	$\pi$	1

\*4 このとき (3.1.1) より  $\llbracket \alpha, \beta \rrbracket \leq \llbracket \beta, \alpha \rrbracket$

\*5 表 3.1 の最後の 2 段は  $\beta = \pm \alpha$  の場合に相当する.

**補題 3.1.2:**

$(\mathbb{E}, \Phi)$  をルート系とする.  $\alpha \neq \pm\beta$  を満たす任意の  $\alpha, \beta \in \Phi$  に対して以下が成り立つ:

- (1)  $(\alpha, \beta) > 0 \implies \alpha - \beta \in \Phi$
- (2)  $(\alpha, \beta) < 0 \implies \alpha + \beta \in \Phi$

**証明**  $(\alpha, \beta) > 0$  とする. このとき  $[\alpha, \beta] > 0$  であるから, 表 3.1 より  $[\alpha, \beta], [\beta, \alpha]$  の少なくとも一方は 1 に等しい.  $[\alpha, \beta] = 1$  だとすると, (Root-3) から  $\sigma_\beta(\alpha) = \alpha - \beta \in \Phi$  がいえる.  $[\beta, \alpha] = 1$  ならば  $\sigma_\alpha(\beta) = \beta - \alpha \in \Phi$  であり,  $\sigma_{\beta-\alpha}(\beta - \alpha) = \alpha - \beta \in \Phi$  が従う. (2) は (1) において  $\beta$  の代わりに  $-\beta = \sigma_\beta(\beta) \in \Phi$  を用いて同じ議論をすれば良い. ■

**定義 3.1.2:  $\alpha$ -string through  $\beta$**

$(\mathbb{E}, \Phi)$  をルート系とする.  $\alpha \neq \pm\beta$  を満たす任意の  $\alpha, \beta \in \Phi$  に対して,  $\Phi$  の部分集合

$$\{\beta + \lambda\alpha \in \mathbb{E} \mid \lambda \in \mathbb{Z}\} \cap \Phi$$

のことを  $\alpha$ -string through  $\beta$  と呼ぶ.

**命題 3.1.1:  $\alpha$ -string through  $\beta$  の性質**

$(\mathbb{E}, \Phi)$  をルート系とする.  $\alpha \neq \pm\beta$  を満たす任意の  $\alpha, \beta \in \Phi$  に対して

$$\begin{aligned} r &:= \max\{\lambda \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \mid \beta - \lambda\alpha \in \Phi\}, \\ q &:= \max\{\lambda \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \mid \beta + \lambda\alpha \in \Phi\} \end{aligned}$$

とおく. このとき以下が成り立つ:

- (1)  $\alpha$ -string through  $\beta$  は  $\mathbb{E}$  の部分集合

$$\{\beta + \lambda\alpha \in \mathbb{E} \mid -r \leq \lambda \leq q\} \tag{3.1.3}$$

に等しい. i.e.  $-r \leq \forall \lambda \leq q$  に対して  $\beta + \lambda\alpha \in \Phi$  である.

- (2)  $\alpha$ -string through  $\beta$  は鏡映  $\sigma_\alpha$  の作用の下で不変である.
- (3)  $r - q = [\beta, \alpha]$ . 特に  $\alpha$ -string through  $\beta$  の長さは 4 以下である.

**証明** (1) 背理法により示す. ある  $-r < \lambda < q$  に対して  $\beta + \lambda\alpha \notin \Phi$  であるとする. このときある  $-r \leq s < p \leq q$  が存在して  $\beta + s\alpha \in \Phi$ ,  $\beta + (s-1)\alpha \notin \Phi$ ,  $\beta + (p-1)\alpha \notin \Phi$ ,  $\beta + p\alpha \in \Phi$  を満たすが, 補題 3.1.2 の対偶よりこのとき  $(\alpha, \beta + s\alpha) \leq 0 \leq (\alpha, \beta + p\alpha)$  が成り立つ. よって  $(p-s)(\alpha, \alpha) \geq 0$  である. 然るに  $p < s$  かつ  $(\alpha, \alpha) > 0$  なのでこれは矛盾である.

- (2)  $-r \leq \forall \lambda \leq q$  に対して

$$\begin{aligned} \sigma_\alpha(\beta + \lambda\alpha) &= \beta + \lambda\alpha - [\beta, \alpha]\alpha - \lambda[\alpha, \alpha]\alpha \\ &= \beta - ([\beta, \alpha] + \lambda)\alpha \end{aligned}$$

が成り立つ. (Root-3) より最右辺は  $\Phi$  の元であり, かつ (Root-4) より  $[\beta, \alpha] + \lambda \in \mathbb{Z}$  なので, (1)

より  $-r \leq \llbracket \beta, \alpha \rrbracket + \lambda \leq q$  だと分かった.

(3)  $r, q$  の定義より, (2) の証明において

$$\sigma_\alpha(\beta + q\alpha) = \beta - (\llbracket \beta, \alpha \rrbracket + q)\alpha = \beta - r\alpha$$

が成り立たねばならない. よって

$$r - q = \llbracket \beta, \alpha \rrbracket$$

である. 表 3.1 より  $|r - q| \leq 3$  であるから, 集合 (3.1.3) の要素数は 4 以下である. ■

### 定義 3.1.3: 双対ルート系

**ルート系**  $(\mathbb{E}, \Phi)$  に対して

$$\Phi^\vee := \left\{ \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \in \mathbb{E} \mid \alpha \in \Phi \right\}$$

とおき, 組  $(\mathbb{E}, \Phi^\vee)$  のことを  $(\mathbb{E}, \Phi)$  の**双対ルート系** (dual root system) と呼ぶ.

$\alpha \in \Phi$  に対して

$$\alpha^\vee := \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \in \Phi^\vee$$

と書く.

双対ルート系が**ルート系の公理**を充たすことを確認しよう:

**(Root-1,2)**  $(\mathbb{E}, \Phi)$  がルート系なので明らか.

**(Root-3)**  $\forall \alpha^\vee, \beta^\vee \in \Phi^\vee$  をとる. このとき

$$\begin{aligned} \sigma_{\alpha^\vee}(\beta^\vee) &= \frac{2}{(\beta, \beta)} \beta - \left\llbracket \frac{2}{(\beta, \beta)} \beta, \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \right\rrbracket \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \\ &= \frac{2}{(\beta, \beta)} \beta - \frac{\frac{2}{(\beta, \beta)}}{\frac{2}{(\alpha, \alpha)}} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \\ &= \frac{2}{(\beta, \beta)} \sigma_\alpha(\beta) \end{aligned} \tag{3.1.4}$$

だが,

$$\begin{aligned} (\sigma_\alpha(\beta), \sigma_\alpha(\beta)) &= (\beta, \beta) - 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket (\beta, \alpha) + \llbracket \beta, \alpha \rrbracket^2 (\alpha, \alpha) \\ &= (\beta, \beta) - 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket (\beta, \alpha) + 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket (\beta, \alpha) \\ &= (\beta, \beta) \end{aligned}$$

なので

$$\sigma_{\alpha^\vee}(\beta^\vee) = \sigma_\alpha(\beta)^\vee \in \Phi^\vee$$

だと分かった.

**(Root-4)**  $\forall \frac{2}{(\alpha, \alpha)}\alpha, \frac{2}{(\beta, \beta)}\beta \in \Phi^\vee$  をとる. このとき

$$\begin{aligned} \llbracket \beta^\vee, \alpha^\vee \rrbracket &= \left\llbracket \frac{2}{(\beta, \beta)}\beta, \frac{2}{(\alpha, \alpha)}\alpha \right\rrbracket \\ &= \frac{\frac{2}{(\beta, \beta)}}{\frac{2}{(\alpha, \alpha)}} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \\ &= \frac{2(\alpha, \beta)}{2(\beta, \alpha)} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \\ &= \frac{\llbracket \alpha, \beta \rrbracket}{\llbracket \beta, \alpha \rrbracket} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \\ &= \llbracket \alpha, \beta \rrbracket \in \mathbb{Z} \end{aligned}$$

が言えた.

### 3.1.2 Weyl 群

#### 定義 3.1.4: Weyl 群

$(\mathbb{E}, \Phi)$  をルート系とする.  $\text{GL}(\mathbb{E})$  の部分集合  $\{\sigma_\alpha \in \text{GL}(\mathbb{E}) \mid \alpha \in \Phi\}$  が生成する  $\text{GL}(\mathbb{E})$  の部分群のことをルート系  $(\mathbb{E}, \Phi)$  の **Weyl 群** (Weyl group) と呼び,  $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  と書く.

$\forall \sigma \in \mathscr{W}$  に対して,

$$\text{len}(\sigma) := \min\{t \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \mid \sigma = \sigma_{\alpha_1} \circ \cdots \circ \sigma_{\alpha_t} \text{ w/ } \alpha_i \in \Phi\}$$

を  $\sigma$  の長さ (length) と呼ぶ. ただし  $\text{len}(\text{id}_{\mathbb{E}}) := 0$  と定義する.

! 本資料の以降では, 文脈上考えているルート系が明らかな場合  $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  を  $\mathscr{W}$  と略記する.

**(Root3)** より,  $\forall \tau \in \mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  の  $\Phi$  への制限は全単射である. その上 **(Root-1)** から  $\Phi$  は有限集合でかつ  $\mathbb{E} = \text{Span}_{\mathbb{R}} \Phi$  が成り立つので,  $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  を  $\Phi$  に作用する対称群  $\mathfrak{S}_{|\Phi|}$  の部分群と同一視できる. 特に  $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  は有限群である.

#### 補題 3.1.3:

$(\mathbb{E}, \Phi)$  をルート系とする.  $\tau \in \text{GL}(\mathbb{E})$  が  $\tau(\Phi) = \Phi$  を満たすならば,  $\forall \alpha, \beta \in \Phi$  に対して以下が成り立つ:

- (1)  $\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1} = \sigma_{\tau(\alpha)}$
- (2)  $\llbracket \beta, \alpha \rrbracket = \llbracket \tau(\beta), \tau(\alpha) \rrbracket$

**証明**  $\forall \alpha, \beta \in \Phi$  をとる. **(Root-3)** より  $\sigma_\alpha(\beta) \in \Phi$  なので,  $\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\tau(\beta)) = \sigma_\alpha(\tau(\beta)) \in \Phi$  が成り立つ. 一方で

$$\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\tau(\beta)) = \tau(\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha) = \tau(\beta) - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \tau(\alpha) \quad (3.1.5)$$

である.  $\beta \in \Phi$  は任意で  $\tau \in \text{GL}(\mathbb{E})$  は全単射なので

$$\text{(RF-1)} \quad \tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\Phi) = \Phi$$

$$\text{(RF-2)} \quad \forall \beta \in P_\alpha, \tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\beta) = \beta$$

$$\text{(RF-3)} \quad \tau(\alpha) \in \Phi \setminus \{0\}, \tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\tau(\alpha)) = -\tau(\alpha)$$

が成り立つことが分かった. よって補題 3.1.1 より  $\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1} = \sigma_{\tau(\alpha)}$  である.

さらに (3.1.5) から

$$\tau(\beta) - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \tau(\alpha) = \sigma_{\tau(\alpha)}(\tau(\beta)) = \tau(\beta) - \llbracket \tau(\beta), \tau(\alpha) \rrbracket \tau(\alpha)$$

が分かるので (2) が従う. ■

### 定義 3.1.5: ルート系の同型

2 つのルート系  $(\mathbb{E}, \Phi)$ ,  $(\mathbb{E}', \Phi')$  を与える. 写像

$$\phi: \mathbb{E} \longrightarrow \mathbb{E}'$$

がルート系の同型写像 (isomorphism) であるとは, 以下の 3 条件を満たすことを言う:

- (1)  $\phi$  は  $\mathbb{R}$ -ベクトル空間の同型写像
- (2)  $\phi(\Phi) = \Phi'$
- (3)  $\forall \alpha, \beta \in \Phi$  に対して  $\llbracket \phi(\beta), \phi(\alpha) \rrbracket = \llbracket \beta, \alpha \rrbracket$

ルート系  $(\mathbb{E}, \Phi)$  の自己同型 (automorphism) とは,  $\phi \in \text{GL}(\mathbb{E})$  であって  $\phi(\Phi) = \Phi$  を満たすものを言う. これは補題 3.1.3-(2) により自動的にルート系の同型となる. ルート系の自己同型全体が写像の合成に関してなす群のことをルート系の自己同型群と呼び,  $\text{Aut } \Phi$  と書く.

### ルート系の同型

$$\phi: (\mathbb{E}, \Phi) \longrightarrow (\mathbb{E}', \Phi')$$

について,  $\forall \alpha, \beta \in \Phi$  に対して

$$\sigma_{\phi(\alpha)} \circ \phi(\beta) = \phi(\beta) - \llbracket \phi(\beta), \phi(\alpha) \rrbracket \phi(\alpha) = \phi(\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha) = \phi \circ \sigma_\alpha(\beta)$$

が成り立つ. i.e. ルート系の図式

$$\begin{array}{ccc} \Phi & \xrightarrow{\phi} & \Phi' \\ \sigma_\alpha \downarrow & & \downarrow \sigma_{\phi(\alpha)} \\ \Phi & \xrightarrow{\phi} & \Phi' \end{array}$$

は可換である. よってルート系の同型は Weyl 群の自然な (群の) 同型

$$\begin{aligned} \bar{\phi}: \mathcal{W}_\mathbb{E}(\Phi) &\longrightarrow \mathcal{W}_{\mathbb{E}'}(\Phi'), \\ \sigma &\longmapsto \phi \circ \sigma \circ \phi^{-1} \end{aligned}$$

を引き起こす.

#### 補題 3.1.4:

ルート系  $(\mathbb{E}, \Phi)$  の Weyl 群  $\mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  は, ルート系の自己同型群  $\text{Aut } \Phi$  の正規部分群である.

**証明**  $\forall \sigma \in \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$  を 1 つとる. このときある  $\alpha_1, \dots, \alpha_k \in \Phi$  が存在して  $\sigma = \sigma_{\alpha_1} \circ \dots \circ \sigma_{\alpha_k}$  と書ける<sup>\*6</sup>. 従って  $\forall \tau \in \text{Aut } \Phi$  に対して, 補題 3.1.3-(1) より

$$\tau \circ \sigma \circ \tau^{-1} = (\tau \circ \sigma_{\alpha_1} \circ \tau^{-1}) \circ \dots \circ (\tau \circ \sigma_{\alpha_k} \circ \tau^{-1}) = \sigma_{\tau(\alpha_1)} \circ \dots \circ \sigma_{\tau(\alpha_k)} \in \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$$

が成り立つ. i.e.  $\mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi) \triangleleft \text{Aut } \Phi$  である. ■

#### 補題 3.1.5: 双対ルートの Weyl 群

$$\mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi) \cong \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi^{\vee})$$

**証明** (3.1.4) より, 写像  $\sigma_{\alpha} \mapsto \sigma_{\alpha^{\vee}}$  は同型写像である. ■

## 3.2 単純ルートと Weyl 群

この節では  $(\mathbb{E}, \Phi)$  を任意のランク  $l$  のルート系とし, その Weyl 群を  $\mathcal{W}$  と略記する.

### 3.2.1 ルート系の底と Weyl の区画

#### 定義 3.2.1: ルート系の底

$\Phi$  の部分集合  $\Delta \subset \Phi$  が底 (base) であるとは, 以下を充たすことをいう:

(B-1)  $\Delta$  は  $\mathbb{R}$ -ベクトル空間  $\mathbb{E}$  の基底である.

(B-2)  $\forall \beta \in \Phi$  に対して整数の族  $\{\beta_{\alpha}\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{Z}$  が一意的に存在して

$$\beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{\alpha} \alpha$$

を充たし,  $\forall \alpha \in \Delta, \beta_{\alpha} \geq 0$  であるか  $\forall \alpha \in \Delta, \beta_{\alpha} \leq 0$  であるかのどちらかである.

- $\Delta$  の元のことを単純ルート (simple root) と呼ぶ.
- $\beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{\alpha} \alpha \in \Phi$  に対して

$$\text{ht } \beta := \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{\alpha} \in \mathbb{Z}$$

と定義し, 底  $\Delta$  に関するルート  $\beta$  の高さ (height) と呼ぶ.

<sup>\*6</sup>  $\sigma_{\alpha_i}^{-1} = \sigma_{\alpha_i}$  なのでこれで良い.



- $\beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \alpha \in \Phi$  が**正** (resp. **負**) であるとは,  $\forall \alpha \in \Delta, \beta_\alpha \geq 0$  (resp.  $\forall \alpha \in \Delta, \beta_\alpha \leq 0$ ) が成り立つことを言い,  $\beta \succ 0$  (resp.  $\beta \prec 0$ ) と書く<sup>a</sup>.
- 正 (resp. 負) のルート全体の集合のことを  $\Phi^+$  (resp.  $\Phi^-$ ) と書く<sup>b</sup>.
- $\mathbb{E}$  上の半順序  $\prec \subset \mathbb{E} \times \mathbb{E}$  を

$$\mu \prec \lambda \stackrel{\text{def}}{\iff} \exists! \{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}_{\geq 0}, \lambda - \mu = \sum_{\alpha \in \Delta} k_\alpha \alpha$$

と定義する.

<sup>a</sup> L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X コマンドは  $\succ$  が `\succ`,  $\prec$  が `\prec` である.

<sup>b</sup> 明らかに  $\Phi^- = -\Phi^+$  である.

$\prec$  が半順序になっていることを確認しておこう:

**(反射律)**  $\forall \mu \in \mathbb{E}$  に対して  $\mu - \mu = 0$  が成り立つので  $\mu \prec \mu$  である.

**(反対称律)**  $\mu \prec \lambda$  かつ  $\lambda \prec \mu$  だとする. このとき  $\{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta}, \{l_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}_{\geq 0}$  が一意的に存在して

$$\lambda - \mu = \sum_{\alpha \in \Delta} k_\alpha \alpha, \quad \mu - \lambda = \sum_{\alpha \in \Delta} l_\alpha \alpha$$

と書ける. 辺々足すと **(B-1)** より  $\forall \alpha \in \Delta$  に対して  $k_\alpha + l_\alpha = 0$  だと分かるが,  $k_\alpha \geq 0$  かつ  $l_\alpha \geq 0$  なので  $k_\alpha = l_\alpha = 0$ , i.e.  $\mu - \lambda = 0 \iff \mu = \lambda$  が言えた.

**(推移律)**  $\mu \prec \lambda$  かつ  $\lambda \prec \nu$  だとする. このとき  $\nu - \mu = (\nu - \lambda) + (\lambda - \mu)$  なので明らかに  $\mu \prec \nu$  である.

ルート系  $(\mathbb{E}, \Phi)$  の**底**を定義したのは良いが, 存在しなくては意味がない.

#### 補題 3.2.1:

$\Delta$  が  $\Phi$  の**底**ならば, 相異なる任意の 2 つの単純ルート  $\alpha, \beta \in \Delta$  に対して  $(\alpha, \beta) \leq 0$  であり,  $\alpha - \beta \notin \Delta$  である.

**証明** 背理法により示す.  $(\alpha, \beta) > 0$  だとする. 仮定より  $\alpha \neq \beta$  であり, かつ  $\Delta$  の元の線型独立性から  $\beta \neq -\alpha$  なので, 補題 3.1.2 から  $\alpha - \beta \in \Delta$  ということになる. 然るにこのとき  $\alpha - \beta \in \Phi$  が  $\alpha, \beta \in \Delta$  の係数 1, -1 の線型結合で書けていることになり **(B-2)** に矛盾する. ■

### 定義 3.2.2:

$\forall \gamma \in \mathbb{E}$  に対して以下を定義する:

- $\Phi$  の部分集合

$$\Phi^+(\gamma) := \{ \alpha \in \Phi \mid (\gamma, \alpha) > 0 \}$$

- 

$$\gamma \in \mathbb{E} \setminus \bigcup_{\alpha \in \Phi} P_\alpha$$

のとき,  $\gamma$  は**正則** (regular) であるという.  $\gamma$  が正則でないとき**特異** (singular) であるという.

- $\alpha \in \Phi^+(\gamma)$  が

$$\exists \beta_1, \beta_2 \in \Phi^+(\gamma), \alpha = \beta_1 + \beta_2$$

を満たすとき,  $\alpha$  は**分割可能** (decomposable) であるという. 分割可能でないとき**分割不可能** (indecomposable) であるという.

$\gamma$  が正則ならば  $\forall \alpha \in \Phi$  に対して  $(\gamma, \alpha) \neq 0$  なので, (Root-2) から  $\Phi = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$  (disjoint union) が成り立つ.

### 定理 3.2.1: 底の存在

**正則**な任意の  $\gamma \in \mathbb{E}$  を与える. このとき集合

$$\Delta(\gamma) := \{ \alpha \in \Phi^+(\gamma) \mid \text{分割不可能} \}$$

は  $\Phi$  の**底**である. 逆に  $\Phi$  の任意の底  $\Delta$  に対してある正則な  $\gamma \in \mathbb{E}$  が存在して  $\Delta = \Delta(\gamma)$  となる.

#### 証明 step1: $\Phi^+(\gamma)$ の任意の元は $\Delta(\gamma)$ の $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書ける

背理法により示す.  $\Delta(\gamma)$  の  $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書けない  $\alpha \in \Phi^+(\gamma)$  が存在するとする. このとき, そのような  $\alpha$  のうち  $(\gamma, \alpha)$  が最小であるようなものが存在するのでそれを  $\alpha_0$  とおく.  $\alpha_0 \notin \Delta(\gamma)$  なので<sup>\*7</sup>  $\alpha_0$  は分割可能であり, ある  $\beta_1, \beta_2 \in \Phi^+(\gamma)$  が存在して  $\alpha = \beta_1 + \beta_2$  と書ける. このとき

$$(\gamma, \alpha_0) = (\gamma, \beta_1) + (\gamma, \beta_2) > (\gamma, \beta_i)$$

が成り立つので,  $\alpha_0$  の最小性から  $\beta_1, \beta_2$  はどちらも  $\Delta(\gamma)$  の元の  $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書ける. 然るにこのとき  $\alpha$  も  $\Delta(\gamma)$  の元の  $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書けることになって矛盾.

#### step2: $\alpha, \beta \in \Delta(\gamma)$ かつ $\alpha \neq \beta$ ならば, $(\alpha, \beta) \leq 0$

背理法により示す.  $(\alpha, \beta) > 0$  を仮定する. このとき補題 3.1.2-(1) より  $\alpha - \beta \in \Phi$  であり,  $\beta - \alpha = \sigma_{\alpha-\beta}(\alpha - \beta) \in \Phi$  もわかる. よって  $\alpha - \beta \in \Phi^+(\gamma)$  または  $\beta - \alpha \in \Phi^+(\gamma)$  である. 然るに前者の場合  $\alpha = \beta + (\alpha - \beta)$  なので  $\alpha \in \Delta(\gamma)$  が分割可能ということになって矛盾し, 後者の場合は  $\beta = \alpha + (\beta - \alpha)$  なので  $\beta \in \Delta(\gamma)$  が分割可能ということになって矛盾である.

<sup>\*7</sup>  $\alpha_0 \in \Delta(\gamma)$  だとすると,  $\alpha_0 \in \Delta(\gamma)$  の係数  $1 \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$  の線型結合として書けていることになり矛盾.

**step3:  $\Delta(\gamma)$  の元は互いに線型独立**

$\{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta(\gamma)} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}$  に対して  $\sum_{\alpha \in \Delta(\gamma)} k_\alpha \alpha = 0$  を仮定する.  $\forall \alpha \in \Delta(\gamma)$  に対して

$$\Delta^+(\gamma) := \{\alpha \in \Delta(\gamma) \mid k_\alpha > 0\}, \quad \Delta^-(\gamma) := \{\alpha \in \Delta(\gamma) \mid k_\alpha < 0\}$$

とおくと  $\Delta^+(\gamma) \cap \Delta^-(\gamma) = \emptyset$  で, 仮定は

$$\sum_{\alpha \in \Delta^+(\gamma)} k_\alpha \alpha = \sum_{\alpha \in \Delta^-(\gamma)} (-k_\alpha) \alpha$$

と同値である.  $\varepsilon := \sum_{\alpha \in \Delta^+(\gamma)} k_\alpha \alpha$  とおくと, **step2** から

$$0 \leq (\varepsilon, \varepsilon) = \sum_{\alpha \in \Delta^+(\gamma), \beta \in \Delta^-(\gamma)} k_\alpha (-k_\beta) (\alpha, \beta) \leq 0$$

が成り立つので  $\varepsilon = 0$  だとわかる. よって

$$0 = (\gamma, \varepsilon) = \sum_{\alpha \in \Delta^+(\gamma)} k_\alpha (\gamma, \alpha) = \sum_{\alpha \in \Delta^-(\gamma)} (-k_\alpha) (\gamma, \alpha)$$

であり,  $\forall \alpha \in \Delta(\gamma)$ ,  $k_\alpha = 0$  が言えた.

**step4:  $\Delta(\gamma)$  は  $\Phi$  の底**

$\Phi = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$  なので, **step1** と併せて **(B-2)** が, **step3** と併せて **(B-1)** が従う.

**step5: 任意の底  $\Delta$  に対してある正則な  $\gamma \in \mathbb{E}$  が存在して  $\Delta = \Delta(\gamma)$  となる**

$\Phi$  の底  $\Delta$  が与えられたとき,  $\forall \alpha \in \Delta$  に対して  $(\gamma, \alpha) > 0$  を充たす  $\gamma \in \mathbb{E}$  をとる<sup>\*8</sup>. **(B-2)** より  $\gamma$  は正則であり, かつ  $\forall \beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \alpha \in \Phi^+$  に対して

$$(\gamma, \beta) = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha (\gamma, \alpha) > 0$$

が成り立つので  $\beta \in \Phi^+(\gamma)$ , i.e.  $\Phi^+ \subset \Phi^+(\gamma)$ ,  $\Phi^- = -\Phi^+ \subset -\Phi^+(\gamma)$  も分かる. ところが **step4** より  $\Phi = \Phi^+ \amalg \Phi^- = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$  なので,  $\Phi^+ = \Phi^+(\gamma)$  でなくてはならない. 従って  $\forall \alpha \in \Delta$  は分割不可能であり<sup>\*9</sup>,  $\Delta \subset \Delta(\gamma)$  だと分かった. **(B-1)** および **step4** より  $|\Delta| = |\Delta(\gamma)| = l$  なので<sup>\*10</sup>  $\Delta = \Delta(\gamma)$  が言えた. ■

<sup>\*8</sup> このような  $\gamma$  が存在することを示そう. **(B-1)** より  $\Delta$  は  $\mathbb{E}$  の基底だから,  $\forall \alpha$  に対して  $\gamma_\alpha \in \mathbb{E}$  を,  $\mathbb{E}$  の部分ベクトル空間  $\text{Span}_{\mathbb{K}}(\Delta \setminus \{\alpha\})$  の  $(, )$  に関する直交補空間  $(\text{Span}_{\mathbb{K}}(\Delta \setminus \{\alpha\}))^\perp$  への  $\alpha$  の射影とする.  $\Delta$  の元は全て互いに線型独立なので  $\gamma_\alpha \neq 0$  である. このとき,  $\{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}_{>0}$  に対して  $\gamma := \sum_{\alpha \in \Delta} k_\alpha \gamma_\alpha$  とおけば,  $\forall \alpha \in \Delta$  に対して  $(\gamma, \alpha) = k_\alpha (\gamma_\alpha, \alpha) > 0$  が成り立つ.

<sup>\*9</sup>  $\beta_1 = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{1\alpha} \alpha$ ,  $\beta_2 = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{2\alpha} \alpha \in \Phi^+ = \Phi^+(\gamma)$  を用いて  $\alpha = \beta_1 + \beta_2$  と書けたとする. このとき  $\Delta$  の元の線型独立性から  $\beta_{1\alpha} + \beta_{2\alpha} = 1$  かつ  $\forall \gamma \in \Delta \setminus \{\alpha\}$ ,  $\beta_{1\gamma} + \beta_{2\gamma} = 0$  が成り立つが, **(B-2)** より  $(\beta_{1\alpha}, \beta_{2\alpha}) = (1, 0)$  または  $(0, 1)$  かつ  $\forall \gamma \in \Delta \setminus \{\alpha\}$ ,  $\beta_{1\gamma} = \beta_{2\gamma} = 0$ , i.e.  $(\beta_1, \beta_2) = (\alpha, 0)$  または  $(0, \alpha)$  でなくてはならず,  $0 \notin \Phi^+$  に矛盾.

<sup>\*10</sup> [?] では集合の濃度 (cardinality) の意味で  $\text{Card } \Delta$  と書かれていた.

### 定義 3.2.3: Weyl の区画

- 位相空間<sup>a</sup>  $\mathbb{E}$  の部分空間  $\mathbb{E} \setminus \bigcup_{\alpha \in \Phi} P_\alpha$  の連結成分の 1 つのことを (開な) **Weyl の区画** (Weyl chamber)<sup>b</sup> と呼ぶ.
- **正則** な  $\gamma \in \mathbb{E}$  が属する Weyl の区画のことを  $\mathfrak{C}(\gamma)$  と書く<sup>c</sup>.
- $\Phi$  の **底**  $\Delta$  に対して定理 3.2.1 の意味で  $\Delta = \Delta(\gamma)$  ならば  $\mathfrak{C}(\Delta) := \mathfrak{C}(\gamma)$  とおき,  $\Delta$  に関する **Weyl の基本区画** (fundamental Weyl chamber relative to  $\Delta$ )<sup>d</sup> と呼ぶ.

<sup>a</sup> Euclid 空間の定義の脚注を参照.

<sup>b</sup> この訳語は筆者が勝手につけたものである. [?] では Weyl の部屋と呼ばれていた.

<sup>c</sup> L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X コマンドは  $\backslash\mathrm{mathfrak{C}}$

<sup>d</sup> この訳語は全く普及していない気がする.  $\Delta$  に関する基本的 Weyl の部屋だと語感が悪いと思ったのでこのような訳語を充てた.

### 補題 3.2.2: Weyl の区画の基本性質

正則な任意の  $\gamma, \gamma' \in \mathbb{E}$  および任意の  $\Phi$  の **底**  $\Delta$  を与える. 定理 3.2.1 によって得られる  $\Phi$  の **底** を  $\Delta(\gamma)$  と書く.

- (1)  $\mathfrak{C}(\gamma) = \mathfrak{C}(\gamma') \iff \Delta(\gamma) = \Delta(\gamma')$   
 (2) 写像

$$\begin{aligned} \{\Phi \text{ の底全体の集合} \} &\longrightarrow \{\text{Weyl の区画全体の集合}\}, \\ \Delta &\longmapsto \mathfrak{C}(\Delta) \end{aligned}$$

は全単射である.

- (3)  $\mathfrak{C}(\Delta) = \{ \beta \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Delta, (\beta, \alpha) > 0 \}$

証明 (1)  $\alpha \in \Phi$  に関する鏡映面  $P_\alpha$  に関して

$$P_\alpha^+ := \{ \beta \in \mathbb{E} \mid (\beta, \alpha) > 0 \}, \quad P_\alpha^- := \{ \beta \in \mathbb{E} \mid (\beta, \alpha) < 0 \}$$

とおく. すると  $\mathbb{E} \setminus P_\alpha = P_\alpha^+ \cup P_\alpha^-$  (disjoint union) となるから,

$$\begin{aligned} \mathbb{E} \setminus \bigcup_{\alpha \in \Phi} P_\alpha &= \bigcap_{\alpha \in \Phi} (\mathbb{E} \setminus P_\alpha) \\ &= \bigcap_{\alpha \in \Phi} (P_\alpha^+ \cup P_\alpha^-) \\ &= \bigcup_{\{\mu_\alpha\}_{\alpha \in \Phi} \in \prod_{\alpha \in \Phi} \{\pm\}} \bigcap_{\alpha \in \Phi} P_\alpha^{\mu_\alpha} \end{aligned}$$

である. 最右辺の  $\bigcap_{\alpha \in \Phi} P_\alpha^{\mu_\alpha}$  は凸集合の共通部分なので凸集合であり, 従って連結である. さらに  $\{\mu_\alpha\}_{\alpha \in \Phi} \in \prod_{\alpha \in \Phi} \{\pm\}$  に関する重複を除いて位相空間の意味で disjoint であるから Weyl の区画であ

る<sup>\*11</sup>. 従って  $\mathfrak{C}(\gamma)$  は,  $\forall \alpha \in \Phi$  に対して

$$\mu_\alpha(\gamma) := \begin{cases} +, & (\gamma, \alpha) > 0, \\ -, & (\gamma, \alpha) < 0 \end{cases}$$

とおけば

$$\mathfrak{C}(\gamma) = \bigcap_{\alpha \in \Phi} P_\alpha^{\mu_\alpha(\gamma)} = \{ \beta \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Phi, (\gamma, \alpha)(\beta, \alpha) > 0 \} \quad (3.2.1)$$

と書ける. よって

$$\begin{aligned} \mathfrak{C}(\gamma) = \mathfrak{C}(\gamma') &\iff \forall \alpha \in \Phi, \mu_\alpha(\gamma) = \mu_\alpha(\gamma') \\ &\iff \Phi^+(\gamma) = \Phi^+(\gamma') \\ &\iff \Delta(\gamma) = \Delta(\gamma') \end{aligned}$$

が言える.

(2) (1), 定理 3.2.1, および Weyl の基本区画の定義から従う.

(3)  $\Delta = \Delta(\gamma)$  を満たす正則な  $\gamma \in \mathbb{E}$  を 1 つとる. すると (3.2.1) より

$$\mathfrak{C}(\Delta) = \{ \beta \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Phi, (\gamma, \alpha)(\beta, \alpha) > 0 \}$$

だが,  $\Phi = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$  でかつ  $\Phi^+(\gamma)$  の定義より  $\forall \alpha \in \Phi^+(\gamma)$  に対して  $(\gamma, \alpha) > 0$  が成り立つので

$$\begin{aligned} \mathfrak{C}(\Delta) &= \{ \beta \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Phi^+(\gamma), (\beta, \alpha) > 0 \} \\ &= \{ \beta \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Delta(\gamma), (\beta, \alpha) > 0 \} \end{aligned}$$

だと分かった. ■

### 補題 3.2.3: Weyl の区画と Weyl 群の関係

正則な任意の  $\gamma \in \mathbb{E}$  および任意の  $\Phi$  の底  $\Delta$  を与える. このとき  $\forall \sigma \in \mathcal{W}$  に対して以下が成り立つ:

- (1)  $\sigma(\Delta(\gamma)) = \Delta(\sigma(\gamma))$
- (2)  $\sigma(\Delta)$  もまた  $\Phi$  の底である.
- (3)  $\sigma(\mathfrak{C}(\gamma)) = \mathfrak{C}(\sigma(\gamma))$
- (4)  $\sigma(\mathfrak{C}(\Delta)) = \mathfrak{C}(\sigma(\Delta))$

**証明** 鏡映は等長変換 (isometry) なので  $(\sigma(\alpha), \sigma(\beta)) = (\alpha, \beta)$  が成り立つ.

(1)

$$\begin{aligned} \sigma(\Phi^+(\gamma)) &= \{ \sigma(\alpha) \in \Phi \mid (\gamma, \gamma) = (\sigma(\gamma), \sigma(\alpha)) > 0 \} \\ &= \{ \beta \in \Phi \mid (\sigma(\gamma), \beta) > 0 \} \\ &= \Phi^+(\sigma(\gamma)) \end{aligned}$$

<sup>\*11</sup> より厳密には,  $\mathbb{E} \setminus \bigcup_{\alpha \in \Phi} P_\alpha$  の部分空間として開かつ閉 (clopen) であり, かつそれ自身連結なので, 連結成分の 1 つだと分かる.

が分かる．従って  $\sigma(\Delta(\gamma)) = \sigma(\Delta(\gamma))$  である．

(2) 定理 3.2.1 より，ある正則な  $\gamma \in \mathbb{E}$  が存在して  $\Delta = \Delta(\gamma)$  と書ける．よって (1) から  $\sigma(\Delta) = \Delta(\sigma(\gamma))$  であるが，再度定理 3.2.1 より右辺は  $\Phi$  の底である．

(3) (3.2.1)，および  $\sigma(\Phi) = \Phi$  より

$$\begin{aligned}\sigma(\mathfrak{C}(\gamma)) &= \{ \sigma(\beta) \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Phi, (\gamma, \alpha)(\beta, \alpha) = (\sigma(\gamma), \sigma(\alpha))(\sigma(\beta), \sigma(\alpha)) > 0 \} \\ &= \{ \beta \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Phi, (\sigma(\gamma), \alpha)(\beta, \alpha) > 0 \} \\ &= \mathfrak{C}(\sigma(\gamma))\end{aligned}$$

(4) (4) および定理 3.2.1 より従う．

■

### 3.2.2 単純ルートに関する補題

---

### 3.2.3 Weyl 群の性質

---

### 3.2.4 既約なルート系

---

## 3.3 ルート系の分類

---